

大平夫全集

第四卷

大平大全集 第四卷

岩波書店刊行

昭和五十二年三月十日 發行 ©

定價三〇〇〇圓

著 者 伊 藤 左 千 夫

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 〒101 東京都千代田區一ツ橋一丁目五
株式會社 岩 波 書 店

電話(三十一)六千四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

分家……………三

分家續篇……………三五

後記……………四八

小說・紀行・小品
三

分 家

一

要之助は二十一の年に成東中學校を卒業したのだ、卒業式のある四五日前に、要之助は平生殊に親切に愛してくれた、國語の教師を其私宅に訪問した、其教師と云ふのは、四十五六になる、極めて眞面目な、趣味もあり見識もある、要之助には非常に懐かしい先生であつた。

『お前も愈々今年で卒業だが、此の先猶學問するのか』と問はれて『やらしてくれれば私は最少し學問したいと思ひますが、父も兄も私に此上學問さしてくる様子はありません』と云ふと。

『さうかそれぢや止むを得ん事だ、併し田邊お前それで失望してはいかんぞ、學問以外に人の爲すべき仕事は澤山ある、お前が此上學問するとなると、勢學問で業を求める事になる、併しそれは必しも望しい事では無いのだ、お前の學問はそれで澤山だと云ふのでない、何の業に就いたにせよ、學問と云ふことを忘れてはならない事勿論だが、少許りの學問を便りに、業を求めるのは、最も卑むべき精神であるぞよ、能く世間にあることだから云うて置くのだ、お前がこれから農業なり商工業なり、何れの業に就くにしても、それは今後お前が、

世間に交つて、自然世間の事が判つて來た時、自分の心の向く處に従ふべきだ、業は何をしてもよろしい、精神の卑いのが一番いかにぞよ。

今其教師は成東中學に居ないが、さう云はれた先生の教が深く身に染みてる要之助は、中學だけで學問は止めさせられたけれど、父や兄に不平は無かつた。

要之助は翌年二十二の春、徴兵検査の決定が丙種で免役同様だから、其方は體のきまりが就いたけれど、其位で要之助は體が固より強健の方で無かつた、それで農業を嫌ふとか勞働を卑むとか云ふ精神は無くても、身を農業に委すると云ふ事に就ては、大に疑惧心を抱いて居つたのだ。

それにしても差當どうすることも出来ない身分だから、要之助は決着の無い腹で、父や兄のする耕作に従事して居つた、兩親や兄の方では、要之助は體が細いけれど、なアに二三年百姓……みつちりやれや、いやでも丈夫になると云ふ様な單純な考で、要之助が腰の据らぬ態度で働いて居るのには氣がつかないである。

そして要之助の體は、とほから田邊家の本家であつた家の、一旦廢滅した家名を再興して分家する事になつて居るのだ。それには今から三代前に分家した身内の末娘を要之助と一しよにすることに極めてある。

兩家に暫く幼兒の無かつたところで育てられた花子は、親が四人あるかの如くに愛撫されて、我儘一ぱいに育てられた、兩家の若夫婦達が却て面白からぬ程、花子は我儘を許されて育つた、花子は今年とつて十二と云ふに、未だ全くねんねであつた。

顔の丸い眼の大きい、赤薔々々した、いつも元氣な顔で能く笑ふ兒だ、それでも此春からは毎朝本家の兩親に

は必らずお辭儀をする様になつた、要之助の兄が。

『花子お前は家のお父さんお母さんに許りお辭儀をして、兄さんや姉さんにはなぜお辭儀をしない、お前何ん
 だ、おいらに許りお辭儀をしなければ、これから家の庭通らせないからな、

花子は當惑した顔もしないで、只にこにこつと笑つたまゝ駈け出して終つたのであつた、朝に晩に本家の庭を
 通り抜けして學校通ひする花子は、朝は必ず顔も手足も綺麗だが、晩の歸りには、極つた様に顔から手足まで墨
 が黒々といつてゐる、母が『花子は勉強家だね足にまでお手習をするんだから』。……『だらお母さん金柑おく
 れ』。……『お前そら話が違うでんかい、足にお手習ひするつかと云ふのだよ』、『足い手習ひなんかしやしない
 や』……花子は手に持つた學校道具を呉縁に投げ出して、坐敷へ駈上りさま、母の背へ取つくのであつた、『金
 柑おくれつてばお母さん』。……『あいよく、金柑に用のあるものはお前より外にはないから、家の金柑はみ
 んなお前のもんだがね、そんなに金柑をたべると毒になるだらう』……花子はもう金柑の木へ木のぼりしてゐる、
 そこへ出て來た姉が見て。

『あら要之助さんのお嫁さんが木のぼりしてら……女の木のぼり見たこたねい……女の木のぼり下から見れ
 ば……』

『姉さん馬鹿野郎だ、い、

『あんだい花子さん、

『あんでもないや、

『何といふお轉婆なお嫁さんだらう、

姉は母の見てる前でもあるから、さう云つて何氣なく笑つて居つたけれど、腹の中では、可愛らしいとは思はなかつた、『うちのお母さんも、どういふ氣であんなに我儘をさせとくのだらう、犬かなんその様に丸で野育ちにしろく氣が知れない』、かういふ風に考へて居つた。

姉は其頃から身持になつた氣味が見えた。

兄夫婦許りでなく近所の者までも、最少し何とかしたらと思てる様子だ、花子の兩親さへ、本家であんまり可愛がつてくれるから、どうにも仕様が無いと云つて居る、要之助の兩親の腹では、花子は甘やかして育てたから、腕白して居るまでなのだ、さアといふ事には、あの兒はちゃんと聞別けがある、それに第一學校の成績が、いつも優等だから、何もそんなに細かい事を心配することは無いと安心して居るのだ。

要之助の父と云ふのは、朴訥な正義一偏な人らしいが、世事の大体には間違つた事をしない、平生から云つて居る。

どこの話を聞いても、本家分家の間柄は面白くないが、うちの一家はどうかさうしたく無い。

花子を要之助の名つけ嫁と定めて、生みの子に等しく愛して居るのも、さう云ふ精神から出てる點もあるのだ、無邪氣で元氣な花子が、花役者で兩家をあばれ廻つて居るのは、餘所から羨まれる程兩家の幸福であつた。

要之助も幾分父に似て、餘り物を云はない男だから、自分に百姓が出来るか知らと腹に思つて居つても、ついそんな事は一言も云はないで、二十二の年一年は父兄に従て一生懸命百姓をやつた。

やつて見ると農業は、要之助の考へて居つたよりは猶一層苦しかった、兄は一人前以上に仕事が強、父として六十を越して居つても、要之助には何をして父と一所にやつてゆけない程未だ達者であつた、要之助は弱、いからと父も兄も斟酌してくれるのだが、それでも要之助には眼の玉から火の出るやうな事が始終あつた。

一と苦みした上でなければ一人前の仕事をラクには出来ない。

父も兄も等しくかう云ふて要之助を勵ます『もつとみつちりして掛け、みつちりして』と口癖の様に云はれるが、要之助は漸く精神が動いてる、人のする事を出来ないと言ふ事は無い、どうしてもやつて見せると云ふ様な、其のみつちりとした了簡が無くなつた。

今の若い者は何處のを見ても、どうもみつちりしたところが無くて困る、ラクをして金をまうけやうと云ふのだから浮雲ない。

眞面目な五十年輩な人の話を聞けば誰でもさう云ふ、要之助も父からそれを二三度聞かせられた、けれども要之助の体は農業を勵むには實際少し足りない、農がみつちり出来ないからとて、今の若い者はと要之助を云ひけなすのは少し酷だ。

要之助は迷ひ出した、自分の体がちゃんと極つて居るだけ、要之助は獨り煩悶せねばならなかつた。

要之助が再興すべき家と云ふのは、建物としては何にもないけれど、古い樹木なども相當にあつて、一段餘りの立派な屋敷に一町何段といふ田地も附いてるのだ、只居宅さへ造れば、直ぐに立派な、一戸の農家が出来るのだ、要之助の両親は要之助が曲りなりにも農業を覚えて、其家に据りさへすれば、心配も何もない、村一番の仕合せ

者になれると思つてゐるのだから、要之助の一身に就ては、少しも考へる處無いまでに決定がついてゐるのだ。

要之助は一年農業をやつて見て、自分には逆でも百姓にはなれないと觀念したので、弱い体で無理に農業をしなくとも何をしたつてと迷ひ出したのだ、農業が出来ないと云ふ以上は、分家は問題にならない、あれだけ云ふ両親の希望に背けば、無論両親の世話になることも出来ない、何をするにしても、卑劣な精神でやりたくない。要之助は一日と考に沈む様になつた、世故に長けた常識で考へれば何でも無い事を、未だ世の中を知らない青年の實利に淡泊な、さうして美しい初な性質から、一筋に六つかしく考へて迷ひつゝあるのだ。

要之助は又毎日のやうに來て居る花子を、幼ない我妻として側に見てゐることを云ふまでもなく、深く楽しんで居るのである。花子は兒供心に固よりうっかりして居るのを要之助は兒供ながら自分の妻といふ心で、しげ／＼花子の顔立ち總てを仔細に見つめて居ることが折々ある。兒供の顔にどことて厭なところの有りやうも無い、あたりに人のない時など、思はず引寄せて抱いて見ることもある、又顔の墨を拭ふてやつて肌色の鮮かにあかく美しいのに溜らず煩摺したこともある、さうして花子が平氣な顔して自分に抱かれて居る横顔を、要之助はしんから可愛ゆく思ふのであつた。

『争へないもんですねい、花子さんが要之助さんの前に居ると、見違へる様におとなしいから、ほんとに争へないもんだはなア……』

近所の女房からさう云はれた時も、要之助は花子と自分との結縁の感を深めた。

そんな譯で要之助は、此村に居まいと云ふことは頻りに考へて居つても、花子を捨てる考は少しもない、只花

子の事は差當つての問題でないから、要之助の煩悶する目下の問題中に花子の事は加つて居ない。

十月の中頃に姉は女の子を産んだ、要之助は姉はとうから身持だとは思つて居たものゝ、何時頃産をするのかも知らずに居つた。

姉は十九の年に兄に嫁いで、今二十一になるのだ、嫂はどういふ人か一寸と解りにくい人で、要之助はどうしても、此嫂と打解けて親めなかつた。

其日要之助は何にも知らずに、外から歸つて來ると、庭のあたりを、女(作女)や男(下男)が駈廻つて居て、家の中はごたついて居た、家にあがると、立籠めた家の中は、ひっそりした一種の空氣のうちに、さゝやかなどよめきを湛へて居つた、かまはず奥に行くと、花子の母も姉も來て居つた、嫂の母らしい聲もどこかでしてゐる、隣家の女房向家の婆さん達二人も來て居つた、産婆は今歸つた許りで、父を上座に茶を入れ直さうといふ處であつた。

人々が皆同じ調子に、何か憚る様な風に、聲を抑へて物を云つてゐる、口々に『思つたより早く出たから』……『此分では母も子も達者だまアよかつた』、『何んしろ初産の事だから一時心配しました』、『まア／＼何より目出たい』誰が云ふのか判然しない、皆の云ふ事が一緒に聞えた。

『此の家でも久振りでの赤ん坊だ』是れは父の詞であつた、要之助は壓しつけられるやうな、此場の空氣にそゝられて、譯も無く精神は興奮した。

間もなく次の間で赤兒が泣く、要之助はかういふ場合の物の云ひ様は固より判らない、空しく人々に目禮して、

落ちつかない腰を卸して、浮雲氣に花子が母の隣へ据つた、要之助は生れた許りの赤兒の聲を聞くは初めてであつた、目出たいの喜びのといふ感情は、要之助の心にそぐはなかつた、只此場の空氣から受ける刺撃を強く感ずる許であつた。

赤兒が一頻り泣いて泣き止むと、家の中が更にしつとり靜かになつた、産者の部屋からぼそ／＼話してる聲が聞える、それは嫂の母人だと要之助は思つた、要之助は嫂はどんな風に寝てるか知らと思つた時、不透明な色の惡い嫂の顔が、すつと頭に浮んだ、要之助は此坐に居るに大儀を感じて來た、逃げ出して終ひたいと思ふ程厭な譯では無いが、かういふ或ものを強ひられるやうな、氣のつまるやうな事に長く掛り合つてるのは、要之助の若さでは苦痛なのであつた。

さうしてる處へ、恐れげの無い全く放たれてるやうな晴々した聲が、圍爐裏の間から響いた。

『お母さんおれが……』

思切つて聲の高い、花子の聲だ、家の中の空氣が一度に變つて終つた、見る間に花子は母の先になつて、大きな染付のどんぶりに、菓子や山盛に持つて出て來た、花子は袴をつけた學校服のまゝだ、學校歸りを其儘居つたらしい、席中の人の顔を見廻して元氣に笑つた、母の入れた茶を一人／＼に持廻る、自分の母の前にも行儀よく茶碗を出した、要之助の前にも平氣で持つて來た、さうして平生に似合なく、殊勝に母の腰元へ据つてる。

暗い處へ明りのついたやうに、勿論一坐の話題は花子の爲に變つて終つた、父は。

『花子、赤ん坊見たかい、赤ん坊の名は何とつけやう、なア花子お前の好きな名にしやう、』

花子は只笑つてゐる、『花子さんは今日は全くひとが違つたやうになつた』と隣の女房がほめる、『妹さんが出來たからだらう』と婆さん達がほめる、するうちに花子は母の耳へ口を寄せ、小聲で。

『お母さん蜜柑……』

『そら始つた、それだから花子はうっかり褒められやしない、

花子の母は一寸と花子を睨める。

『えいやね、いくらでも採るがえいよ、喜びの目出たいのと云つたつて、かういふ人が出てこそ花が咲くのだもの。』

『そらはアそれに違ひ無い』席上皆同意だ『花子萬歳だ』と父も云ふ、兄も出て來た、嫂の母も出て來て、辭儀を述べる、兄が『花子やお前の妹が一人出來たんだよ』と云へば花子は『妹ではないや』と云つて皆を笑はせた、要之助は總てを忘れて花子に心が移つた。

要之助は花子を招いて蜜柑の木の下に立つた、金柑の木に木のぼりした春とは、どこか違つて來た事を、要之助は見のがしはしなかつた。

『睦ましい夫婦が出来るでせうね』と、あとで隣の女房も二人の婆さんも云つた。

要之助は苦も心配も無い顔してゐる、花子を背から見て、急にうら悲い思ひが湧いた『自分も百姓はやりたくない、花子にも百姓をさしたくない』要之助は暫くそんな事を考へた、蜜柑二十個許袂へ入れ、一層元氣づいた花子に要之助は引立てられて元の坐に返つた、家の中では最も明りがあるやうになつた。

要之助は一日、中學を同時に出了た友人の、土地に居る二三人を訪問して廻つた、要之助も各學友の消息を、多
少遠耳に聞いては居つたが、今親しく友人から其話を聞くと刺撃が新たであつた。

東京へ出た人が少くなかつた、早稻田へも慶應へも幾人づゝか行つてゐる、第一高等へも一人、是れは要之助と
は親しくした方であつたが、其後はかき一枚よこさないのを要之助はへんだと思つた、學問は止めても何等かの
目的で出京してゐる者も随分多いと云ふ話であつた。

學校を止めて、土地にぼんやり耕作なんかしてゐる者は、餘程の間拔でなければならぬかの様に、要之助は思込
んで終つた、要之助の頭では、五年間中學校でやつた學問と現在父や兄がやつてゐる實氣な農業とは、丸で別の物
の様にしか考へられない、要之助が農業の厭になつたのも只骨が折れるから許りでは無いらしい、要之助は少し
も農業に興味を見出し得なかつた。

要之助は年の明けるのを待つて東京へ走つた、上京後間もなく神田河岸の薪炭屋へ帳附にはいつた、帳附と云
つても、常に印袴天を着て、時には荷車を引きもし押しもするのである。

朝は必ず五時か六時に起され、夜は殆ど十時でなくては寝ることが出来ない、農業ほど馬鹿骨は折れないもの
ゝ、決してラクでは無かつた、要之助は國で一年間農業を勉めたのが、茲へきて大へん爲になつたことを氣づい
た、矢張り一ヶ年農業に従事したのは無駄では無かつた、さもなければ要之助は此の薪炭屋にも辛棒が六づかし
つたらう、要之助は月給三圓五十錢で、朝は五時から夜は十時まで然かも名を呼拾にされつゝ擧使はれてること
は随分と身にこたへた。

要之助は國へ居所を明かさなかつたから出京後一ケ年目に花子の父が始めて尋ねて來た『まア漸くの事尋ねだして來た』といふて來た、是れまでの苦勞の容易で無かつたことが、其の悦び安心したらしい顔に讀まれた。

『お前の精神は數度の手紙で承知して居るから、逢ふても改めて話すことは無い、其後兩家共無事だ、只一度かうしてお前が達者である顔を見て歸ればえいのだ。

要之助も悦ばしい心は抑え切れなかつた、一應自分の我儘を謝し、住所も知らさずに置いた爲め餘計な苦勞をさせた事を詫びた、要之助も一年の間に大へん大人になつた、所謂他人の飯を食つて、外の風に吹かれた経験は樂になつた。

『お前が是非東京で何かやつて見たいと云ふなら、無理とは留めない、併しおれ達のやうな者でも身内の者に相談をかけてやつてくれ。

花子の父、此人からさう云はれるのを有難く思はない譯にはゆかぬ、花子の父は一包かゝへて來た四布風呂敷から、着物帶羽織まで出して要之助に渡した、『夜具は直後から送る小使も少し置いてく』といふのを要之助は小使はあるからと云つて返した。

要之助は飾氣の無い全幅の悦びで花子の父をもてなし、一日の休暇を取つて東京中を案内した、さうして花子の望みといふ寫眞も取つた、それには思切つた土産も添た、花子の父は、『これで兩家も安心だ』と心から喜んで歸國した。

其後間もなく父も兄も用事を兼ねて出京した、父も兄も同じ様に、『一旦かうして東京へ出た以上は是非奮發し